

## 黄 仁官 (ファン インカン)

韓国出身／1992年度奨学生

日本体育大学 体育学研究科博士課程修了

日本体育大学にて教鞭を執られ、教え子には坂口財団奨学生もいたという黄仁官さん。  
陸上選手としてご活躍後、留学生として来日された半生を振り返るエッセイをご寄稿いただきました。



ベルリンの壁崩壊  
と同年1989年、国立  
韓国体育大学を卒業  
し、留学生として日  
本に参りました。

1991年より同大学大  
学院修士課程へ進学  
すると、留学生は2・3  
人程しかおらず、今  
日の「グローバル」と  
は程遠い時代でもあ  
ったと思います。

韓国では、小学校から始めた陸上競技を大  
学まで続け、1984年から1988年には代表と  
してオリンピックにも出場しました。怪我もあ  
りましたが、競技者としては申し分のない良  
い環境に恵まれ、無事に競技者としてピリオ  
ドを打ち「指導者を指導する立場の人間」へ  
と舵を切りました。

きっかけは、当時日本体育大学教授だった  
堀居昭先生との出会いでした。トレーニング  
科学がご専門で、柔道の谷亮子選手の指導  
にもあたられました。先生が韓国の大学にいら  
した際、トレーニングしている私に目を留め  
てくださり、ご挨拶をしました。父の仕事の  
関係で、小学校の途中まで日本で過ごした私  
の日本語を聞くと、驚いた表情をされたこと  
を覚えています。競技者としてトレーニング  
理論や運動生理学に興味を持っていることを  
お伝えし「私のところに来なさい」と仰って  
頂いたことが、大学卒業後の進路と目標が定  
まった瞬間でした。残り2年間の大学生活  
は、練習が終わると寮の門限ギリギリまで塾

(日本語の更なる上達や大学院準備の専門英  
語学習)に通う日々でした。“苦しい”“我慢”  
の日々でもあったように思います。

韓国の軍隊サービスの義務は、在学中または卒  
業後入隊する人が殆どでしたが、軍隊免除制  
度(オリンピックメダリスト・国際大会での  
成績で、体育スポーツ成績優秀者が対象/現  
在廃止)のお陰で入隊の必要がありませんで  
した。しかし、1989年当時は留学が完全自  
由化されておらず、半年もの間、様々な手続  
きや審査を受けた事を憶えています。両親を  
始め、多方面の方々に力添えを頂きながら、  
無事来日し、日体大がある世田谷キャンパス  
の堀居先生の研究室に初めて足を踏み入れ、  
私の“学び”が始まりました。



▲1987年現役当時  
韓国選手権大会 十種競技試合終了後(最左)

知識の無さに気づかされる日々の中、筋内  
の生理学に興味を持っていた私は、「骨格筋内  
のタンパク構成」などの基礎研究に進みまし  
た。当時は「スポーツ科学」という言葉も広

くに認められておらず、身体能力関連研究は医学を介して学ぶ他ありませんでした。私も医学系に近い、マウスなどを用いた身体能力に繋がる研究を続け、「骨格筋の収縮や筋の構造がトレーニング負荷によってどのように変化するのか」の研究を重ねました。

大学院1年目、大学の事務入口にて偶然、奨学生募集のお知らせが目にとまりました。両親の援助もありましたが、学会参加の出費などのために、週1回程のアルバイトをしていました。学生アルバイトの時間制限が非常に厳しい時代で悩んでいたため、面接日に合わせて秋葉原の財団本部へ伺いました。

当日、緊張して面接中に何を話したのか殆ど覚えていませんが、坂口美代子先生が「黄さんは日体大に在学していますね。私も日体大卒業生ですよ」と満面の笑顔で仰っていたことは鮮明に覚えています。それからは毎月1度先生にお会いし、お茶をご馳走いただきながら生活や研究に関して、お忙しい中でも時間をかけてお話されていたことも改めて思い出します。あの時代に自身の基礎作りや研究に時間を投資できたことが柱となり、今日の日体大にて“教える”立場となったのは、先生（坂口財団）との出会いが小生を今に導いて頂いたようにも感じます。

お陰様で無事に大学院修士課程を修了すると、更なる試練の連続がありました。1994年当時の体育スポーツ学問は博士課程を設ける大学が殆どなく、研究を続けるには医学部に進む他ありませんでした。「チャレンジし続けるしかない」と判断し、生活基盤を構築しながら研究できる環境を求め、幾つかの大学で非常勤講師として教えながら拠点を堀居先生の研究室に置き、“学問を学ぶ立場”と“講師として教える立場”の両立の時間を過ごしました。

家族もでき、妻・娘（法学系の大学院在学中）の3人家族で健康で感謝の心をもって生活

しています。2005年体育科学の博士号（日本体育大学）を取得し、現在は日本体育大学及び大学院の教授となりました。31年前の目標でもあった“学び”から“教え”が実現でき、日々感謝の気持ちで初心を忘れず研究・教育の道を歩んでおります。教え子の中には坂口財団の奨学生もおりました。



▲大学での講義のようす

いつも坂口先生にご挨拶をと思いながら時間に追われる日々が続き、時の流れは早くあっという間に27年という時間が経ってしまい、先生や財団には一つも恩返しができず心苦しいばかりでございます。その間ひと時も欠かさず送って頂きました「財団NOW」は欠かさず拝見させて頂いており、今では冒頭の坂口先生のお元気な顔を拝見することが楽しみでもあります。

コロナ禍において世界の様々な風景が一変し困難に陥っておりますが、“始まりあることはいずれ終わりを向える”という言葉のようにコロナの一早い終息を望み、坂口先生のご夫妻と財団関係各位のご健康とご多幸、そして財団の益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。そして、感謝申し上げます。

以上